

女の一生

2008(平成20)年2月3日鑑賞<千日前国際シネマ>

★★★



監督=増村保造/出演=京マチ子/東山千栄子/船越英二/田宮二郎/浦路洋子/三木裕子
/小沢栄太郎/叶順子/仲村隆/山中雄司(角川映画配給/1962年日本映画/94分)

……明治・大正・昭和の激動期に、「堤洋行」を守り抜くのは大変な仕事！
けい(京マチ子)がそんな「女の一生」に挑んだのは一体なぜ……？『戦争
と人間』三部作(70年、71年、73年)ほどのスケール感はないが、大きな時
代の流れの中、ストーリーのポイントはしっかりと。それにしても、良家
のお坊っちゃん、お嬢サマの弱さや無責任さと対比すれば、ひょっとして「貧
乏」が人間を育てるのかも……？

伍代財閥 vs. 堤洋行

五味川純平の原作を山本薩夫監督が映画化した『戦争と人間』(三部作)(70年、71年、73年)は、新興財閥の伍代一族を中心に、1928(昭和3)年以降の満州を主な舞台として展開される戦争と人間の悲劇を描いた名作(『シネマルーム5』173頁参照)。それに対して京マチ子主演の『女の一生』は、「支那」との貿易を営んでいる堤洋行の女主人堤しず(東山千栄子)に拾われ、次第に堤洋行を1人で担っていくことになるヒロイン布引けいの一生を描いたもの。

堤洋行は日清戦争前にしずの夫が創設した、いわばベンチャー企業だが、日清・日露両戦争の勝利とその後の日本の支那進出のおかげで大繁盛。もっとも「伍代財閥」の方は、次女順子(吉永小百合)が反戦思想にかぶれたものの、創設者である伍代由介(滝沢修)やその弟の喬介(芦田伸介)をはじめ、長男英介(高橋悦史)、長女由紀子(浅丘ルリ子)は伍代家のためによく働いていたし、次男の俊介(北大路欣也)も多少共産主義かぶれはしたものの結局は軍隊に行くことに。

ところが堤家の方は、長男伸太郎(船越英二)は絵を描くだけ、次男栄二(田宮二

郎)は中国からの留学生孫(山中雄司)らと革命かぶれだから、男の子には堤家を継ぐ奴は全くいない状態。また長女総子(浦路洋子)と次女ふみ(三木裕子)は、西洋かぶれの音楽家である長女の夫の取り合いで対立するなど目の前のことで精一杯。したがって、こちらも堤洋行の商売については全く関心がないから困ったもの。

そこで、夫の死後堤洋行の経営を一身に背負っていたしずが白羽の矢を立てたのがけい。つまり、けいを長男伸太郎の嫁とし、事実上けいに堤洋行の経営を仕切ってもらおうというアイデアだ。しかし、けいが本当に好きなのは次男の栄二。さて、けいはしずのそんな申し出を受けるのだろうか……？

スタートは明治38年。その時けいは……？

この映画は「女の一生」をテーマとしたものだから、時代背景としては明治・大正・昭和をまたぐ形となっており、明治38(1905)年から昭和20(1945)年までの40年間を描いている。東京を舞台とした物語スタート時のけいは16歳。時代は明治38年。旅順陥落の喜びによってまちは提灯行列で大賑わいだ。

父親は日清戦争で死亡し、母親も死んでしまった今、けいは叔父さん叔母さんの家にやっかいになっていたが、冷たくされて追い出されることに。そんなけいを偶然見つけ捨ててくれたのが、しずの誕生祝いをやっていた堤家。けいを捨ててくれた理由は、①たまたま次男栄二がやさしい性格だったこと、②けいとしずが偶然同じ誕生日だったこと、③日清戦争で右足が不自由になっている、しずの弟章介(小沢栄太郎)が日清戦争で父親を失ったけいに親近感をもったことだが、これによって、けいの運命は大転換することに……。

明治43年。重大な転機が……

それから5年後の明治43(1910)年。堤家の親戚の養女にしてもらったけいは女中のように働いていたが、持ち前の明るさもあり、今や堤家にとって欠かせない存在に。そんなけいを長男伸太郎も、次男栄二も好意の目でみていた。そんなある日突然降って湧いたのが、前述したしずからの縁談話。

もちろんこれは、けいと次男栄二が好き合っていることを知りつつ、堤洋行を立ち行かせるためのいわば政略結婚の提案。ところが、それを知った革命かぶれした甘ちゃんの栄二は、「2人で家を出て支那に行き、革命のために頑張ろう」などと提案す

る始末。小さい時から貧乏のつらさが骨身にしみているうえ、しずの恩義に報いなければならないと考えているけいが、そんなノー天気な話に乗れるはずがないのは当然。

しずに対して「少し考えさせて下さい」と言ったのは余計だと私は思うのだが、結論としてけいはしずの申し出を受け、晴れて伸太郎と結婚することに。他方、これによって堤家と決別した栄二は家を出て1人支那に行ったらしいが、さて、彼はその後どんな役割を……？

大正8年。けいは30歳！

この映画の特徴は時代の流れを新聞記事によって示していくこと。明治が終わり大正に入中、日本も大きく変わっていたが、中国も孫文の登場など大きな変化が。そして大正8（1919）年。けいは（計算上）30歳に！ しずが死亡した今、堤洋行の経営はけいの手腕ひとつにかかっていたが、けいの経営は軍との接触を含めて強気一辺倒。それは、たとえば支那人労働者からの賃上げ要求に対する対処法を聞いていても明らか……。

この映画で面白いのは、革命家気どりの栄二が多少現実離れたキャラであるのに対し、しずの弟で結果的に最後までけいを支えることになる章介の支那人に対するやさしい視点。軍隊の力を借りてでも支那人の要求を押さえつけようとするけいに対して、章介は「力づくで支那人をねじ伏せるのはよくない」とアドバイスしたが、これは彼が「支那浪人」として活躍した後、日清戦争で右足に大ケガをしたことによって得た人生観。そして、これはあの当時きわめてまれなもの。そんな章介のアドバイスがあっても、けいはあくまで強気だが……。

昭和2年。けいは38歳！

昭和2（1927）年といえば、1931年9月18日の満州事変の4年前だから、日中関係が日増しに悪化していた時代。そして、この時けいは（計算上）38歳！ そんな時代に日中貿易を商売としているのだから、けいが軍隊とますます「癒着」していたことは容易に想像できる。そんなけいが、今一人娘の知栄（ちえ）（叶順子）の結婚相手としてターゲットにしているのは、将来有望な陸軍軍人。もちろんこれは略略結婚で、有力軍人が身内になれば何かと便利という計算だが、さて知栄は……？

この時期における大ハプニングは、栄二が突然中国から帰ってきたこと。一体それ

は何のため……？ 堤洋行の経営のことで頭がいっぱいのけいはそんなことまであまり頭が回らなかったようで、特高の刑事たちがやってきても、まだ何のことか半信半疑。しかし大変なのは、かの悪名高き「治安維持法」が1925年4月22日に公布され、5月12日に施行されていたこと。同法は1928年の改正で最高刑が死刑とされたが、ホントに栄二はこの治安維持法で逮捕されるの……？ そんな緊迫感あふれるシーンが展開されるから注目を！

手錠をかけられて連れていかれる栄二の姿を目撃した娘の知栄は、「お母さんは栄二さんを売ったのね！」とおかんむりだが、私に言わせれば、その怒りはちょっと筋違い。どうもこの映画を観ていると、全体的に夫の伸太郎をはじめ堤家の人々は、章介を除いて悪いことの責任をすべてけいに負かぶせている感が強いから、けいは少しかわいそう。もっともそれは、けいの「女の一生」を強調して描くためのやむをえないテクニック……？

昭和19年、いよいよ日本は……？ この時けいは55歳！

もともと「相性」の悪かったけいと伸太郎だが、けいのおかげで堤洋行がもっていることを伸太郎はよく理解していたから、「堤家から出ていくのは自分だ」と割り切り、大正8年以降1人横浜のアパートに住んでいた。また、母親に反発する一人娘知栄も家を出ていったきり。彼女は今、貧乏音楽家と結婚し、子供も1人生まれているのだが、堤家とは完全に没交渉らしい。したがって、戦局が悪化していく中、けいを支えているのは章介1人だったが、何せ商品を運ぶ輸送船がアメリカの潜水艦によって次々と沈められているのだから、まともな貿易の商売などできるわけがなく、堤洋行の存続も時間の問題……。

他方、時間の経過は人間のわだかまりを解消させるようで、知栄の夫が出征するのを契機として伸太郎が久しぶりに堤家を訪れ、知栄の子供だけでも引きとってほしいと頼むことに。もちろん、けいは喜んでこれをオーケーしたのだが、さらに「知栄も帰ってきたら……」「あなたも帰ってきたら……」という会話の中、突然伸太郎が怒り始めたので、けいはビックリ。つまり、この会話の中で考え方のズレ、価値観の相違があらためて明確になったわけだ。もっとも、けいにしてみれば、なぜ伸太郎が急に怒りだしたのか自体がわからないようだから、このケンカは始末が悪い。

そんなシーンはあなたの目でじっくりと味わってほしいが、私に言わせれば、「け

いは精一杯頑張っているのだから、そこまで怒らなくても……」というのが正直なところ。そんな中、昭和20年8月広島と長崎に原爆が投下され、遂にあの8月15日を迎えることに。

昭和20年、焼け野原の東京で！

堤洋行のため一生懸命頑張ってきたけいだったが、今や堤洋行は完全に崩壊。夫伸太郎はあのケンカのさなかに死んでしまったうえ、空襲の中逃げおくれた章介も死亡。また、知栄と孫たちは田舎に疎開したままでまだ東京に帰っていなかった。したがって、今は焼けてしまったかつての堤家にある小さな防空壕の中で生活しているのは、けい1人だけ。

けいの「女の一生」を描くためには、本当はけいが死亡するところまでフォローすべきだろうが、増村保造監督は昭和20年つまりけいが56歳までで打ち止めとし、その後のけいの人生は観客の解釈に委ねている。それは上映時間の関係もあるが、それ以上にこの後のけいの人生には映画にするような波乱に富んだストーリーがなく、ただ静かに余生を送るだけと考えたため……？

そこで、増村監督がこの映画のラストとしたのは、栄二の帰還！ 治安維持法で長い間刑務所に入っていた（らしい）栄二が日本の敗戦によって釈放され、それまでと手の平を返したようにちょっとは優遇される立場で戻ってきたというわけだ。けいは「あんな形であなたを特高につき出して……」と謝罪するのに対し、栄二は「それを責める気持があれば帰ってきません」と述べたうえ、さらに「今でもボクのことを好きですか？」「それなら2人でここを出て一緒に暮らしましょう」と、またまたノー天気な提案を。もっとも、今となってはしずとの約束にこだわる必要のないけいだから、栄二の提案どおりに行動してもいいのは当然。そう思って注目していると、けいが身支度をして栄二と一緒に出てきたから、少しビックリ。しかし、思い出の場所を通り過ぎたところで足をとめたけいは、やはりある決断を。さて、それは……？

このハイライトとなるラストシーンは、あなた自身の目で……。

2008(平成20)年2月4日記

カラダスキャンでメタボに克つ！

近時ウエスト85cmを分岐点とした「メタボ論争」がかまびすしいが、あなたは体重組成計＝カラダスキャンを知ってる？

文明の進歩や科学の発展は使いこなさなければ損。今ドキの健康管理は体重だけではなく、体脂肪率、体年齢、BMI、基礎代謝、骨格筋率、内臓脂肪レベル、体幹皮下脂肪率などのチェックが大切！ 私が監査役を務めているコンピューターのオービックは今年創



立40周年を迎え盛大な式典を催したが、その記念品として貰ったのがコレ。年齢、性別、身長を登録し、毎朝、毎晩パンツ1枚でこの上に立ち、両手両足ですべての数値をチェックしメモするのが今や私のお楽しみの日課となっている。体脂肪率が20%を切っているのも立派だが、私の最大の自慢は体年齢。来年1月に晴れて還暦を迎える私のそれは、何と44～47歳！ 摂生すれば若くなるし、不摂生したなと思えば案の定。ちなみに、夜の測定後テレビを観ながら1時間ステップ運動をし、風呂からあがって再度計ると、すべての数値が健康に向けて上昇しているうえ、1歳は若返っているから数字は正直！ お仕着せのメタボ検診を年に1度受けて、一喜一憂したのではダメ。カラダスキャンを有効に活用してメタボに克ち、自分で健康管理をしなければ！

2008（平成20）年6月18日

